

樹木上の自己共役作用素

のみをす Green 関数, (欲理)青本和彦
(AOMOTO, K.)

局所有限な連続な樹木 Γ に対して $V(\Gamma)$, $E(\Gamma)$

を各々 頂点集合, 辺集合とする. $\ell^2(\Gamma)$ を $V(\Gamma)$ 上の複素数値関数で, 絶対値2乗可積分な関数のなすヒルベルト空間とする. $\ell^2(\Gamma)$ 上の線型作用素 A を

$$(1) \quad Au(\gamma) = \sum_{\langle \gamma, \gamma' \rangle} u(\gamma') a_{\gamma, \gamma'} + u(\gamma) a_{\gamma, \gamma},$$

$a_{\gamma, \gamma'} = a_{\gamma', \gamma} \in \mathbb{R}$, $a_{\gamma, \gamma} \in \mathbb{R}$ κ よて定義す

る. ここで $\langle \gamma, \gamma' \rangle$ は γ' が γ κ 隣接している事を示すものとする. A κ に関して以下の仮定を置く:

$$(H1) \quad a_{\gamma, \gamma'} \neq 0 \quad \langle \gamma, \gamma' \rangle$$

(H2) A の領域を $D(A) = \left\{ u(\gamma) \in \ell^2(\Gamma) ; Au \in \ell^2(\Gamma) \right\}$ とおくとき, A は自己共役である: $A = A^*$

このとき A の Green 核 $(z - A)^{-1}_{\gamma, \gamma'} =$

$= G(\gamma, \gamma' | z)$ は $\operatorname{Im} z \neq 0$ なる任意の複素数 z に対して存在し、且つ z について正則である。 $G(\gamma, \gamma' | z)$ は次のスペクトル表示を持つ：

$$(2) \quad \int_{-\infty}^{\infty} \frac{d\Theta(\gamma, \gamma' | \lambda)}{\lambda - z} = G(\gamma, \gamma' | z)$$

ここで、 $d\Theta(\gamma, \gamma' | \lambda)$ はスペクトル密度を表わす、また $\Theta(\gamma, \gamma' | \lambda)$ は実軸上増加関数でしかも常数ではない。従て $G(\gamma, \gamma' | z)$ は $\operatorname{Im} z > 0$ のときは $\operatorname{Im} G(\gamma, \gamma' | z) < 0$ をみたす。従て $G(\gamma, \gamma' | z)^{-1} = W(z)$ は

$$(3) \quad \operatorname{Im} W(z) \cdot \operatorname{Im} z > 0$$

を $\operatorname{Im} z \neq 0$ のに対してみたしている。我々の主要な結果のひとつは、

[定理 1] $\{W_\gamma(z)\}_{\gamma \in V(\Gamma)}$ は次の代数方

程式の組みたす： 各 $\gamma \in V(\Gamma)$ 每 k

$$(4) \quad z - W_y(z) - Q_{yy} = \sum_{\langle Y, Y' \rangle} \frac{1}{2} (-W_y + \sqrt{W_y^2 + \frac{4Q_{yy}^2}{W_y}}).$$

且つ $W_y(z)$ は $Im z \neq 0$ において 正則
であるが、 $Im z \rightarrow \pm \infty$ において 漸近展開

$$(5) \quad W_y(z) \sim z$$

を持つ。

この定理の証明は次の2個の Lemma
 から直ちに得られる。

[Lemma 1] $\gamma, \gamma' \in V(\Gamma)$ を $\langle \gamma, \gamma' \rangle$
となる 任意の 2頂点とする。 γ_0 を γ と γ'
を結ぶ辺を Γ から取り除いた樹木
(2個の連結成分を持つ) の 同一の連結成分
の 任意の 頂点とするとき、 比

$$(6) \quad \frac{G(\gamma_0, \gamma'|z)}{G(\gamma_0, \gamma|z)}$$

は γ の取り方によらず, γ, γ' のみ
 K 依存する。

これは, A の自己共役性から直ちに
 従う. この Lemma の結果とて, γ_0 が
 γ と同じ連結成分 K 属するとき K ,

$$(7) \quad \frac{G(\gamma_0, \gamma' | z)}{G(\gamma_0, \gamma | z)} = \alpha(\gamma, | z)$$

とおき, $\alpha(\gamma, | z)$ を乗法子と呼んで

おく. Lemma 1 と Green 核の定義から

[Lemma 2] $\langle \gamma, \gamma' \rangle \underset{K \text{ 对して}}$

$$(8) \quad \alpha(\gamma, \gamma') = \frac{-W + \sqrt{W^2 + 4G_{\gamma, \gamma'}^2 W}}{2G_{\gamma, \gamma'}}$$

が成り立つ.

(8) から, 左辺 従て 右辺も $\gamma, \gamma' \neq 0$
 K 对して 正則である. 実際

$$(9) \quad \alpha(\gamma, \gamma') = \frac{G(\gamma, \gamma' | z)}{G(\gamma, \gamma | z)}$$

で, $G(\gamma, \gamma | z) \neq 0$ である.

さて (4), (5) は $\tilde{W}_y(z)$ の Laurent

展開(漸近展開)

$$(10) \quad \tilde{W}_y(z) = z + w_y^{(0)} + \frac{w_y^{(1)}}{z} + \frac{w_y^{(2)}}{z^2} + \dots$$

を一意に決めるか、右辺は $z=\infty$ の近傍で収束するとは限らない。従て (10) は $\tilde{W}_y(z)$ を解析関数として一意に定義することは限らない。しかし $W_y(z) = G(y, y/z)^{-1}$ は

次の不等式をみたす：

[Lemma 3] $\langle y, y' \rangle$ K に対して

$$(11) \quad \operatorname{Im} \left(-W_y + \sqrt{W_y^2 + \frac{4G_{yy'}^2 W_y}{W_{y'}}} \right) \cdot \operatorname{Im} z < 0.$$

これは、Dirichlet の公式を適用する事 K より、やはり A の自己共役性から得られる。

$G(y, y'/z)$ は $W_y(z)$, (7), (8) K より一意に決定されるので、 $G(y, y'/z)$ は

$W(z)$ を決めさえすればよし。この K に関して次の結果が得られる。

$$\text{[定理2]} \quad \left\{ \tilde{W}_y(z) \right\}_{y \in V(\Gamma)} \text{ は } W_y = \tilde{W}_y$$

とおくとき, (4), (5), (11) をみたすものとする。

このとき $\tilde{W}_y(z)$ は $G(y, \gamma | z)^{-1}$ K 等しい。

すなわち $W_y(z) = G(y, \gamma | z)^{-1}$ は (4), (5), (11) K より一意に決定される。

証明の方針は, Γ が有限樹木のときは $G(y, \gamma | z)$ が有理的且つ $z = \infty$ において正則である事 K 注意し, $G(y, \gamma | z)$ つまり $W_y(z)$ が (4), (5) K より一意に決まる事 K 注意する。次に Γ が有限樹木の増大列 $\{\Gamma_N\}_{N \geq 1}$ を考え, その上の Green 関数 $G_N(y, \gamma' | z)$ を構成する。

今 $0 \in \mathcal{V}(\Gamma_N)$ を固定し, $G_N(y, 0)$ を考える。 $\text{dis}(0, \gamma) = n$ として, 0 と γ を結ぶ測地線 $[0, \gamma]$ 上の点で, γ の手前の点, すなわち $\text{dis}(0, \gamma') = n-1$

となる実 γ' を $\sigma(\gamma)$ と書く, 一方 γ と隣接し, γ の向こう側の実を $\sigma_{+,1}(\gamma), \dots, \sigma_{+,p}(\gamma)$ とする. すると 複数 $u(\gamma) = G_N(\gamma, 0)$ は $\gamma, \sigma_{+,j}(\gamma) \in V(\Gamma_N)$ とさ

$$(12) \quad z u(\gamma) = a_{\gamma, \sigma(\gamma)} u(\sigma(\gamma)) + a_{\gamma, \gamma} u(\gamma)$$

$$+ \sum_{j=1}^p a_{\gamma, \sigma_{+,j}(\gamma)} u(\sigma_{+,j}(\gamma))$$

をみたす. 今

$$(13) \quad \zeta_\gamma = a_{\gamma, \sigma(\gamma)} \frac{u(\gamma)}{u(\sigma(\gamma))} = a_{\gamma, \sigma(\gamma)} \alpha\left(\frac{\sigma(\gamma)}{\gamma}\right)$$

とおけば, (12) は

$$(14) \quad \zeta_\gamma = \frac{a_{\gamma, \sigma(\gamma)}^2}{z - a_{\gamma, \gamma} - \sum_{j=1}^p \zeta_{\sigma_{+,j}(\gamma)}}$$

と書ける. 今 $a_m z > 0$ と仮定すれば,

$a_m \zeta_{\sigma_{+,j}(\gamma)} \leq 0$ がすべての j について成立すれ

は、 $\operatorname{Im} \zeta_j < 0$ である。又 $\zeta_{0+j}(Y)$

が下半面のある円の内部を動けば、
 $\sum_{j=1}^p \zeta_{0+j}(Y)$ も又 下半面のある円の内
部を動き、従て ζ_j も下半面のある
円の内部を動く。又

$$(15) \quad G_N(0,0|z) = \frac{1}{z - a_{0,0} - \sum_{y > 0} \zeta_y}$$

であるから、各 ζ_y が下半面の円の内部
を動けば、 $G_N(0,0|z)$ は下半面の円の
内部を動く。

Γ_N の境界の各実 $y' K$ において、すべて

$\zeta_{y'}$ は $\operatorname{Im} \zeta_{y'} \leq 0$ とすれば、上記の考察

より、 $\operatorname{Im} G_N(0,0|z) < 0$ であるが、 $G_N(0,0|z)$

は下半面のある円の内部を走る事となる。
この円を Δ_N とおく。この時次が成り立つ。

[Lemma 4] $N_1 < N_2$ ならば $\Delta_{N_1} \supset \Delta_{N_2}$.

従って $\lim_{N \rightarrow \infty} \Delta_N = \Delta_\infty$ が存在し,

これは 円であるか 又は 矩である. これらは,
各々 極限円又は極限矩と呼ばれる.

次は 1次元 格子 K に対してはよく知られ
た 事実の 樹木への拡張である.

[定理 3] $c_m z > 0$ と仮定する. A
が 自己共役であるための 必要十分条件
は, Δ_∞ 極限矩となる事である.

従って 以下 Δ_∞ は 常 K 極限矩と仮定
ある. すると 各 N K に対して Γ_N の 境界
条件

$$(16) \quad \alpha(\frac{\zeta(1)}{y}) = \frac{G(0, \gamma/z)}{G(0, \zeta(1)/z)}, \quad \gamma \in \partial \Gamma_N$$

をいか K 定めようと, Δ_N の 極限である
 Δ_∞ は 矩 K 收縮するのだから, $N \rightarrow \infty$
K する限り, $G_N(0, 0/z)$ は 境界条件

の取り方によらず、ただひとつの関数 K 收束する。

[定理2の証明] (4), (5), (11) をみたす
関数族が $W_y(z) = G(y, \gamma | z)$ の他 K ある
ものとし、これらを $\{W_y^*(z)\}_{y \in V(\Gamma)}$ とする。

各 Γ_N 上に制限してみれば、これらは
各々

$$(17) \quad \begin{cases} -W_{N,y} + \sqrt{W_{N,y}^2 + \frac{4G_{y,\Sigma(y)} W_{N,y}}{W_{N,\Sigma(y)}}} = 2\zeta_{N,y} \\ -W_{N,y}^* + \sqrt{(W_{N,y}^*)^2 + \frac{4G_{y,\Sigma(y)} W_{N,y}^*}{W_{N,\Sigma(y)}}} = 2\zeta_{N,y}^* \end{cases}$$

$(y \in \partial\Gamma_N)$ が与えられた、(4), (5) の
解 K 他ならぬ。これらは一意 K 与えられる。
ここで $\Im \zeta_{N,y} < 0$, $\Im \zeta_{N,y}^* < 0$ である。

従て、対応する Green 核 $G_N(0,0|z)$, $G_N^*(0,0|z)$
は Δ_K 値をとる。 $\Delta_N \mapsto \Delta_0 (= -\infty)$

である故

$$(48) \quad \lim_{N \rightarrow \infty} G_N(0, 0/z) = \lim_{N \rightarrow \infty} G_N^*(0, 0/z) \\ = G(0, 0/z)$$

でなくてはならぬ。原実で極限実であれば、他のすべての頂実でそうである事が証明されるので、

$$(49) \quad \lim_{N \rightarrow \infty} G_N(\gamma, \gamma/z) = \lim_{N \rightarrow \infty} G_N^*(\gamma, \gamma/z) \\ = G(\gamma, \gamma/z)$$

かすべての $\gamma \in V(\Gamma)$ かつて言える。これにて定理2の証明が出来た。

文献

- [1] K. AOMOTO, Proc. Japan Acad., Vol 64, Ser. A, No. 4, 123 - 125 (1988)
- [2] — , Selfadjointness and limit pointness for adjacency operators on a tree, preprint, 1988.